序 文

伊佐山浩通
順天堂大学医学部消化器内科　教授

一門で力を尽くした書籍『順天堂・東大・がん研流　ERCP・EUSマスターブック』が刊行され，感無量です．どの原稿を見ても現場が思い浮かび，まさに我々の経験が詰まっている書籍であります．胆・膵疾患に対する内視鏡診療は未だ難しく，かつ偶発症のリスクと隣合わせです．そのような手技を生業としていくには，診断・治療・手技についての一貫したストラテジーが必要と考えています．ただし，手技のやり方を切り取ったハウツー本ではこれは伝わらないと常々思っておりました．今回，東大で同じ釜の飯を食った仲間である加藤　順先生（千葉大学　診療教授・内視鏡センター長）のご推薦により，本書を企画・編集する機会を頂きました．加藤先生も疾患の病態にこだわった書籍『かとじゅん流 IBD診療』を出版され，非常に評判が良いと聞いています．

本書は，「基礎知識」，「手技」，「診療ストラテジー」，「トラブルシューティング」の全4章で構成されており，胆膵の内視鏡診療をしっかり網羅しております．最も重要なのはストラテジーですが，実際には患者ごとに多くのバリエーションがあり，全く同じにはならないのが通常です．我々にとっての標準を記載し，読者の皆様が応用する拠り所となることを祈念しております．本書は，東大胆膵グループで学んだ医師たちと，そこから派生した新たなグループの医師たちの両方に執筆を依頼しました．根底に流れるストラテジーには同じ潮流があり，施設，時代ごとの経験によって手技とトラブルシューティングに多くのバリエーションがあります．今回は施設ごとのこだわりを示していただき，なおかつ他施設のエキスパートが追加の情報を加えています．そのため，情報量が非常に多いのが特徴ですが，胆膵内視鏡は全症例に正解を出すのが難しい世界ですので，有益かつ安全な医療を患者さんに提供するにはこれでも足りないと思っています．それでも，本書を学ぶことにより読者の皆さんが安全かつ効率良い胆膵内視鏡治療を行う礎ができるものと信じております．また，本書を執筆・編集することで我々自身も知識の整理と，新たな学びがあり，成長できたと考えております．

本書は多くの方の努力によって完成，出版されました．ただでさえ多忙な中，執筆に時間を割いてくれた胆膵内科医たち，大変だった編集作業を分担してくれた笹平直樹先生と中井陽介先生，そしてこのような機会を頂き，素晴らしい書籍を作ってくれたGakkenの谷口陽一様に感謝申し上げます．

2023年6月

序 文

笹平直樹
がん研究会有明病院消化器センター肝・胆・膵内科　部長

多彩な技術の習得は胆膵内視鏡の魅力の一つだと思います．一方で，胆膵内視鏡を担う医師には，急性胆管炎や重症膵炎のほか，がんの終末期など緊張感をもった患者管理も求められます．「技術の習得」の前には，病態を正しく理解し，適応や戦略を身につけることが必要です．「緊張感をもった患者管理」は，緊急処置前の初期対応のみならず，術後の合併症・偶発症の予防，早期診断，早期治療にも非常に重要です．本書の企画にあたり，伊佐山浩通先生より，「手技に特化せず，病態や戦略，さらには術後管理までを網羅する胆膵内視鏡の専門書を目指したい」という意向が示され，中井陽介先生とともに話し合いを重ねて参りました．入門書や指南書として以外に，知識の整理としても活用いただけるものに仕上がっていると思います．

本書の特徴として，比較的若手の胆膵内視鏡医も執筆していることが挙げられます．「手技」や「トラブルシューティング」の章では，指導者目線のみならず，指導を受ける側の視点で普段注意していることなども記載されていますし，「診療ストラテジー」の章では，病棟や外来，救急の最前線での思考や，普段のカンファランスで議論されている戦略などが具体的に示されています．いわば，他の施設に見学に出向き，朝のカンファレンスから日中の内視鏡現場，夕方の病棟までのさまざまなシチュエーションで目にすることがそのまま書かれている臨場感のある書籍ではないかと思います．

施設見学に出向くと，その施設特有のさまざまな流儀に気づきます．他施設の流儀に気づくことは，改めて自施設の流儀を認識するきっかけになり，新たな流儀が生まれることになります．本書にも各項目において，施設の流儀が記載されています．もともと同じ流儀の中で育った同志とそこに集う仲間の原稿を読みながら，変わらぬ流儀，味付けがなされた流儀など，それぞれを楽しませていただきました．読者の皆様におかれましても，メインテーマを十分理解されている項目であっても，この「○○流」に新たな発見があるかと思いますし，他書にはない編集委員3名それぞれによる「マスターからのワンポイントアドバイス」も何かのお役に立てれば幸いです．

最後に，お忙しい中，かなり無理なテーマを含めて執筆・動画編集などをお引き受けいただいた多くの先生方，ならびに，巧みなかじ取りで出版に導いていただいた谷口陽一氏に，心より感謝申し上げます．

2023年6月

序 文

中井陽介
東京大学医学部附属病院光学医療診療部　准教授

私自身が内科医となり，胆膵診療に魅せられて早くも25年が経とうとしています．この25年の間にERCP手技の難度も高くなり，Interventional EUS，小腸内視鏡を用いたERCPなど新しい手技も開発されてきました．このように胆膵診療が大きく発展した時代の一部でいられたことを非常に幸せに思います．

私が日々の胆膵診療において常々感じているのは，そこにある“文化”です．長年の診療経験により培われた，この“文化”というのが，それぞれの胆膵診療チームの根底に多かれ少なかれ流れているのです．私自身が経験した師匠の背中を見て学ぶという時代はそれを感じとり，自分で消化していたわけですが，最近では書籍・動画・学会・ウェビナー（Webinar）など，自施設以外の胆膵診療を学ぶ機会も以前では考えられないほど増えています．それでも現場にいないとわからない，言葉には表せないような“空気感”というのは，いまだに存在するのではないかと私自身は考えています．10年以上前に米国に臨床留学した際に，まさにこの“空気感”の違いを五感で強烈に感じたことを今でも忘れられません．これは海外に限らず，国内においても自施設以外の臨床の場に直接行くことで学ぶ点は，今でも多いと思います．

今回，順天堂大学，東京大学，がん研有明病院の3施設の流儀ということで，本書の企画が始まりました．元をたどれば東京大学の同門ですが，この3つの施設にとどまらず，源流から解き放たれた，あるいはその解き放たれた先に新たに集うことになった，多くの胆膵医が結集して完成したのが本書です．本書では，東京大学胆膵診療の“文化”という源流と，そこから3つの施設の特性に合わせて派生した“流儀”が感じられるような内容になったのではないかと自負しております．もちろん本書に書かれていることだけが正解というわけではなく，各施設の診療に合わせた流儀があると思います．ただ，この流儀というものがあるからこそ，文化が醸成され，連綿と次世代へと引き継ぐことができるのだと思います．本書が皆様の流儀の確立の一助になるとともに，マネージメントが困難な胆膵疾患でお困りの患者さんにとって，より良い治療の提供につながることを願っています．また本書を読んでいただき，さらに現場での“空気感”や“文化”を直接感じたいと思われる若い先生がいらっしゃいましたら，是非我々にお声がけいただき，我々の現場に直接足を踏み入れていただければと思います．

最後になりましたが，多忙な中ご尽力いただきました多くの執筆者の先生方，また源流が同じでありながら三者三様の伊佐山浩通先生，笹平直樹先生，私の3名の編集委員をうまく御していただいた谷口陽一氏に，心より感謝申し上げます．

2023年6月